

フィルモン音帯に関する調査報告

飯島 満・永井美和子・中山俊介

はじめに

フィルモン音帯 (Filmon Endless Sound-Belt) とは、1930年代後半に日本で開発された長時間レコードである。

形状はセルロイド系の合成樹脂を主成分とする幅35ミリ×長さ約13メートルのエンドレステープ（無端帯）で【図1】、30分以上の録音が可能であった。当時もっとも一般に普及していた10インチSPレコードの収録時間が3分前後、そうした時代に登場した音声記録媒体である。



【図1】 フィルモン音帯（東京文化財研究所所蔵）

奇妙な形をした戦前の国産レコードという物珍しさからであろう、これまでも幾度かテレビや新聞雑誌などがフィルモン音帯を取り上げてきた。完全に忘れ去られていたというわけではない。しかしながら、音帯や収録内容の総括的な調査は行われていなかったようである。

東京文化財研究所では、2009年度より、早稲田大学演劇博物館と共同でフィルモン音帯の調査を行っている。今回の報告では、実際に音帯は何種類が制作された可能性があるのか、そして何種類の音帯については現存の実物確認ができるのか、この2点を中心にまとめることにしたい。

なお、「フィルモン」の表記は、製品や広告などを含めた戦前の資料で、「フキルモン」「フキルモン」「フイルモン」「フィルモン」「Filmon」の全てが使われていた。本報告の本文中では、格別な必要がない限り、「フィルモン」で統一している。また、文献資料の引用に際しては、漢字や記号の表記等々、一部を改めたところがある。

1. フィルモン方式による録音再生の概略

フィルモン音帯を製造販売していた日本フィルモン（Nippon Filmon）株式会社は、東京府北多摩郡狛江村岩戸（現在の東京都狛江市岩戸）にあった。『狛江市史』（1985年3月刊）に拠れば、同社の設立は昭和12年（1937）春という。音帯の売れ行きは好調だったとされているが、同12年7月の支那事変以降、時局の悪化に伴う物資不足の影響を受け、昭和15年に会社は解散、工場も軍需工場に転用されてしまう。会社としての存続期間は、昭和12年から同15年まで、足かけでも4年程であったことになる。

音帯の生産期間はさらに1年ほど短かったようである。日本フィルモン株式会社（以下、日本フィルモン）から出された昭和13年元旦の日付を持つ年賀状用の絵葉書¹⁾が残されている。図案は会社の全景（完成予想図）で、そこに年賀の挨拶が添えられており、「我社は昨春以来スタジオと工場を建築中でありましたが年末漸く竣工目下優良製品の完成に努力中です」との一文がある。スタジオと工場の建設工事着工が「昨春」すなわち昭和12年の春、竣工が同年末、「目下優良製品の完成に努力中」を文字通りに昭和13年1月現在の状況と受け取れば、製品の初出荷は昭和13年に入ってからとなる。もっとも、録音用のスタジオ設備だけは、昭和12年8月には完成していたらしい（後述）。最初の発売時までには、ある程度の種類の音帯をそろえておかなければならない。早めにレコード原盤を作成しておく必要上、スタジオの完成を優先させたのであろう。

現在、日本フィルモンに直接的に関わる文献は、ほとんど残されていない。会社の実情を知るには、当時を知る関係者の報告や発言から、情報を拾い集め、継ぎ合わせることになる。参考文献一覧に掲出した中では、坪田耕一「長時間演奏の出来るフィルモン式録音及び再生機構に就いて」[坪田1939]、山中力「忘れられた国産長時間レコード「フィルモン」」[山中1974]、谷勝馬「フィルモンの思い出」[谷1980]が重要である。引用することが多いので、簡単に解説しておくことにする。

[坪田1939]は、フィルモン音帯の技術的な完成者による、録音方法・音帯製作過程・再生機構等の解説である。坪田耕一は、昭和14年（1939）に日本電音製作所（現在のデノン）で国産初の円盤式録音機を開発した技術者陣の中心的人物で、日本フィルモンでは「録音部長」に任じられていたという。[山中1974]は、佐藤銀治郎に取材した聞き書きをまとめたものである。佐藤銀治郎は元日本フィルモン社員で、工場が建設される前の準備段階から関わっていたという。[谷1980]は、坪田耕一の下で録音機の設計と録音助手を務めた谷勝馬（1980年当時はティアック株式会社代表取締役会長）による昭和14年頃の体験談を中心とする記事となっている。

音帯方式による録音再生の発明者は小西正三²⁾、大阪の竜華工業という会社の経営者であった。研究は昭和5年か6年頃から始めていたのだという。日本フィルモン設立時の社長が小西正三である。この時に取締役兼技術部長に就任した細井勇が、共同開発者であった。余談ながら、細井勇は、大阪に本社があった日東蓄音器株式会社（ニットー）の元技術長で、ニットーが大正15年（1926）から昭和3年（1928）にかけて発売していた長時間レコードの発明者としても知られる人物である。ニットーの長時間レコードは、音帯とは別の方式で長時間録音を実現したものであった。その録音再生方法については、参考文献[大西2006]が詳しい。

細井勇の伝記資料〔奈良1939〕（参考文献一覧参照）に拠れば、音帯の開発に携るようになったのが昭和9年頃、「人に聴かせ得る実物の出現に迄漕ぎ付けた」のが昭和11年春だったという。

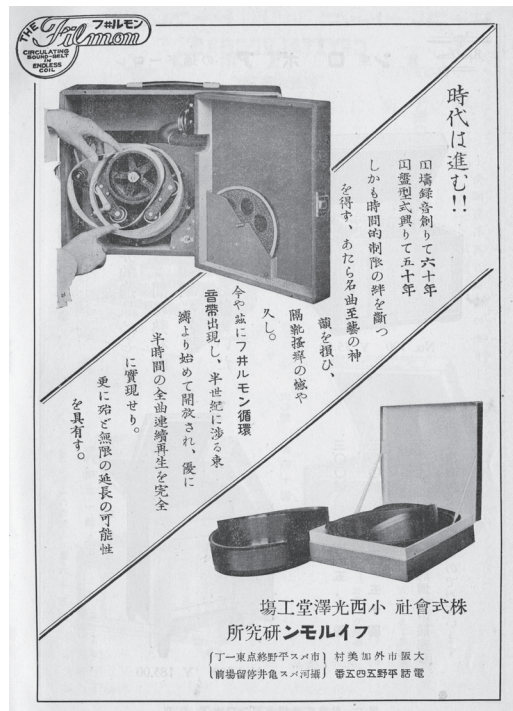
その記事を裏付けるように、昭和11年4月刊の参考文献〔山口1936〕は、「株式会社小西光沢堂工場フィルモン研究所」の広告【図2】を掲載している。所在地の「大阪市外加美村」は、現在の大阪市平野区の一地域である。参考文献〔景山1970〕には、昭和9年の見聞として「細井氏は日東蓄音器を退いて、ほかの会社で長時間用としてフィルム式レコードを研究していた」との記事がある。細井勇が音帯の研究をしていた「ほかの会社」が、小西光沢堂工場³⁾のフィルモン研究所だったのであろう。

ただし、広告を載せはしたものの、製品として販売するまでには至っていなかったらしい。〔山口1936〕には、「フィルモン研究所」以外にコロムビアやテイチク他の大手も広告を出しており、そこに掲載されている製品には、当然のことながら定価が記されているのである。「フィルモン研究所」の広告には、見慣れぬ再生機とベルト状レコードの写真、そこに声高な宣伝文句が綴られているだけなのであった。昭和11年春の段階では、「人に聴かせ得る実物」つまりは音帯の試作品に、ようやく「漕ぎ付けた」だけであって、量産の目途など立ってはいなかったのであろう。広告の主たる目的は、スポンサー探しにあったように思われる。

この広告が今日的に興味深いのは、ひとつには商品名の「フィルモン」が既に使われている点ではなかろうか。【図2】左上のロゴも、ほぼこの形で後の日本フィルモンに踏襲されている（【図7】【図10】参照）。「フィルモン」の由来について、前出の年賀状は「フキルモンは「フキルム音」の意です」と記す。〔坪田1939〕はより詳しく、「そのレコードがフィルム状をなしてゐるところから、フィルム・フォン（Film phon）→フィルム音→フィルモンとなった」と解説している。

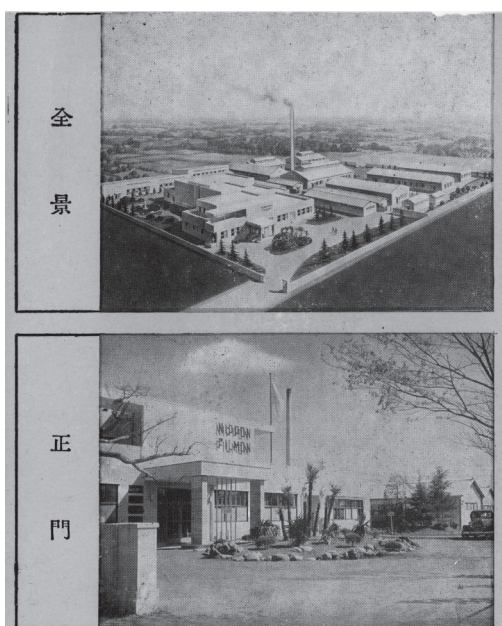
東京狛江に日本フィルモンが設立されるまでの経緯については、佐藤銀治郎の発言が現在では唯一の情報源となっている。肝心な人名に誤りがあるので、やや長文となるが、関連する箇所を引用しておくことにする。

しかし企業化するのに非常に苦心してしましてね。そのときに私の恩師が大阪の松竹の文芸部長をやっていました。その人とどこかで逢いましてね、そんなら一つ話してやろうと、それを持歩いていたのですが、そのうち松竹を彼がやめましてね、日劇を作るのに参加して、東京に来ていたものですから、東京の人達とよく話をしたわけです。そのとき実業家大川平八郎という日劇を作った人に話をしたら、今ちょっとそういう余裕もないしということで、自分の知っている人



【図2】「フィルモン研究所」の広告

を紹介してくれたんです。それが、九州の杵島炭鉱（佐賀県）という会社の社長の鷹取栄という人で、この社長がポンと資本を出してくれたのですよ。[山中1974]



【図3】日本フィルモン株式会社

のかは、憶測の域を出ない。ただ、フィルモン方式の解説としては最も詳細な文献[坪田1939]は、小西正三と細井勇の名前を出していない。日本フィルモンの盛衰を目の当たりにしていた佐藤銀治郎も、細井勇には言及していない。こうした事実は極めて示唆的であるように思われる。

潤沢な資金を得て建設された粕江の日本フィルモン本社は、「白亜の誠に美しい工場」[谷1980]であったという。【図3】は、販売促進用と思われるリーフレット⁵⁾から転載したものである。『フィルモンとは』と題された多色刷りの1枚物（三つ折り）で、会社の全景は先に挨拶文を引用した年賀状に使われていたものと同図、会社の正門は実景と思われる。スタジオや工場内部の写真も掲載している。昭和13年もしくは14年に作られたものと考えて大過ないであろう。



【図4】フィルモン式再生機構部分

上記の内、「大川平八郎」は大川平三郎、「鷹取栄」は高取盛が正しい。日本フィルモン株式会社は、開発者の小西正三と細井勇が大阪在住だったにもかかわらず、東京に設立されていた。出資者となった高取盛の邸宅が、その当時、東京にあったからであろう⁴⁾。

ところが、本社工場が完成する前に「小西正三氏は半歳ならずして引退した」[奈良1939]という。そのおり、取締役を辞任し製作部長となった細井勇も、翌13年3月に会社を去ることになる。[奈良1939]は、「大阪の家も売り〈中略〉一家を挙げて上京の直後」の退社について、「引退させられた」と記す。日本フィルモンの実質的な営業が始まったのは前述のように昭和12年末、開発者の二人は、製品として世に出たフィルモンには、ほとんど関わっていなかったのだった。どのような事情があった

音帯を聞くには、専用の再生機が必要であり、当然のことながら日本フィルモンが再生機の生産を行っていた。同社の製品カタログ⁶⁾には、6種類の再生機が掲載されている。早稲田大学演劇博物館が所蔵するのは、SPレコード再生兼用のモデルFE-10（卓上型三球電気再生機）である。部品の交換を含む部分的な改造は経ているものの、動態保存されている数少ないフィルモン式再生機である。

【図4】は演劇博物館所蔵再生機のフィルモン式再生機構部分である。写真中央のドラム部が反時計に回転し⁷⁾、音帯は内側から外側に引き出されて循環を続ける。そう

して走行する音帯の音溝に金属針をトレースさせ（再生機に音帯を掛けた状態で針は手前から奥に向かって進む）、再生音を得るという仕組みである。

収録可能な時間について、[坪田1939]は、その上限は明示せず「演奏時間はフィルムを長くしても、亦幅を広くしても任意に延長することができるが、実際問題として、便宜上30分程度としている」と記している。「実際問題として、便宜上30分程度」なのである。音帯は全長約13メートルであった。[山中1974]と[谷1980]は、音帯の作成は多くの人員を要する大変な作業であったと記している。「実際問題」とは、その13メートルという長さが、技術的に製造可能な当時の限界だったことを指しているのではないだろうか。その一方で、例えば[谷1980]が「36分まで可能な録音方式」と記すように、フィルム音帯の収録可能時間を約36分とすることも多いようである。先に引用したリーフレットには、既に「三十六分間演奏できます」とある。リーフレットにさかのぼる言説なのかもしれない。

フィルム専用の再生針⁸⁾も発売されていた。10インチSPの収録時間は約3分であり、通常は片面ごとに新しい針と交換する。長時間再生による針および盤面の磨耗は、気になる問題ではある。この点に関して[坪田1939]は、「通常の針を使用して、10インチ円盤片面を演奏したものと、音帯1本を演奏したものとではその磨滅程度はほぼ同じである」と報告している。さらに、「クローム針を使用してみると、音帯1本を演奏しただけでは殆どその磨滅を認め得ない」とも記している。いずれにせよ、専用針の生産は、長時間に対応する再生針の要請があったことを物語るものであろう。

ところで、専用の再生機を用いるといっても、再生方法は、音溝から金属針を通して振動を音に変えるというものであり、原理的には従来の円盤式と変わるものではなかった。フィルム音帯は、いわば平円盤レコードを帯状に仕立て直したものであった。

製造工程も、原盤からスタンパーを作りプレスするという基本的な部分については、平円盤レコードと大きな違いはなかった。無論、平円盤とは形状が異なるだけに、全ての工程において相当な創意工夫が凝らされていた。[坪田1939]や[谷1980]に詳しい。本報告では、特殊な録音施設の概要、製造工程の技術的な解説や苦心談は、それらに譲ることとし、ただ一点、最終的に無端音帯となるま



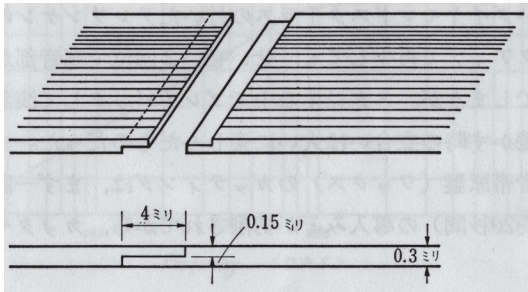
【図5】フィルム音帯（東京文化財研究所所蔵）

での過程についてだけ、簡単に触れておきたい。

音帯の録音原盤となるのは「直径約4メートルの水車のような木製の大輪録音用木車」[谷1980]に巻き付けられたワックスで、これに音溝をカッティング（録音）する。原盤の当初の形態は、直径約4メートルの輪であった。その輪の一か所を切断したもからマスターを取り、マスターからマザー、スタンパーを経て、そこからプレスされて、一本のベルト状のレコードとなる。直線に伸ばせば全長約13メートルの帯⁹⁾が、製品として完成した時点では、【図5】のような、帯の内側と外側が繋がった直径約19センチ（巻きは23回）の多層円筒状の無端帯となる。

フィルモン音帯には、必ずどこか一か所に継ぎ目がある。[坪田1939]は、「継ぎ目は丁度ワックスの時に切り離したところに当る訳で、これを特殊な接合剤を用ゐて、拡大鏡で見ながら接合するのであるが、巧に接続されたものは再生の際殆ど気が附かぬ程度である」と記す。

接合部分は約4ミリ、その拡大図【図6】が[谷1980]に掲載されている。現実には、再生音から接



【図6】音帯の接続箇所

続箇所と判明するようなノイズを聞き分けるのは難しい。目視でも、継ぎ目はほとんど判別できない。確かに「巧に接続され」てはいるのである。ただ、切れてしまった、あるいは切れかかったフィルモン音帯が、時おり確認される。接合は手作業で行われていた。ことによると製品の出来にはばらつきがあり、接合箇所不具合のある音帯が存在するのかもしれない。

2. フィルモン音帯の製品情報

■外箱■

完成したフィルモン音帯は、円筒形（直径約20センチ×高さ約7.5センチ）、もしくは立方形（縦横約19センチ×高さ約8センチ）の外箱に収めて、出荷されていた。フィルモン音帯の製品番号は、価格によって、3000番台、5000番台、7000番台の3種類に分かれていた。それぞれ10円、7円、5円であった。大多数の音帯は円筒形の紙箱に収められており、現物確認した限りにおいて、立方形の箱入りは、製品番号3000番台の、さらにその一部の音帯¹⁰⁾だけであった。

フィルモン音帯は、前述のように、エンドレステープにする必要上、内側の端と外側の端とが繋がっており、その部分が上に飛び出していた【図5】。音帯の幅は35ミリ、完成品を横から見ると、高さは最大で約70ミリ（7センチ）となる。フィルモン音帯は、実におさまりの悪い厄介な形をしている。そうした音帯を収納するために、円筒形の箱の内部に布製のリボンが作り付けになっており、その外に飛び出した箇所をたわめて、金属製の釦で止めるという工夫がなされていた。【図7】上は、出荷当時の様子を再現することを目的に、リボンを掛けた状態で撮影したものである。実際に保管する際には、リボンを外して箱に収めている。長期間リボンをかけたまま放置すると、その部分で音帯が変形する。現物確認した音帯には、リボンのかかった箇所で変形し、たわんだ形のまま歪んでしまったものが少なくないのである。

解説や文句集（見開きでA5とB5の中間となる大きさのものが多く）が付属する場合、右の写真のように、ゆるく二つ折りにして出荷していたらしい。冊子の多くが、二つ折りになった状態で確認されるからである。

【図7】下は上蓋である。表にはハート形に図案化された音帯が描かれ、その中央に収録内容・出演者・製品番号等を印刷した円形の紙ラベルが貼ってある。同じ紙ラベルが上蓋の周囲にも2枚、対角線上に貼られている。ラベルの色は、製品番号3000番台が銀、5000番台が赤系統、7000番台が緑系統となっている。箱の色は褪せているものが多いので判別しにくいものの、4種類ほどあるようである（カラー図版参照）。ラベルの色と箱の色との組み合わせに相関関係は無いと思われる。【図7】の神田伯龍『講談 越の海勇蔵』は、箱がクリーム色で、紙ラベルは薄い青緑、紙ラベルの印刷は緑である。

円筒形の外箱がさながら小さな帽子箱であるのに対し、立方形の箱は、和装本を収める帙を模している。紙ラベルも題籤のように方形で、本でいえば表紙と背表紙あたる箇所には貼られていた。円筒形の箱が横置きであったのに対し、縦置きすることを想定したデザインである。棚に並べるなら、箱は四角い方が便利ではある。帙型の箱に収められていたのは製品番号3000番台の音帯であり、最も高価であった。リーフレット（前出）で紹介されている写真【図8】が、この形の箱だったのもそのためであろう。

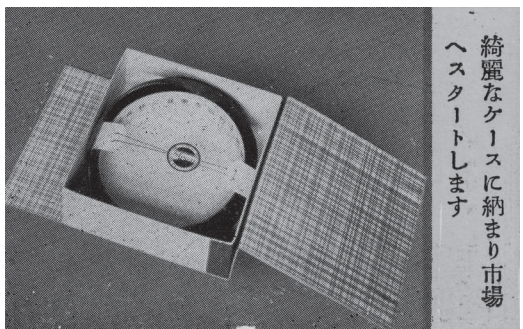
ところが、ひとつ重大な問題があった。縦置きにすると、箱の中では音帯の底に面した箇所に自重がかかる。帙型箱には厚紙製の枠が付属していたので、半ば予想されてはいたのだろう。しかしながら、音帯の素材が合成樹脂で弾力性に富むだけに、縦置きのままにしておくと、紙枠だけでは自重を支えきれず、箱の底に接した箇所から紙枠ごと平らに変形してしまう。音帯を長期間保管するには適した形状ではなかったのである。

■タイトルシール■

平円盤レコードは、中央に印刷された紙のレーベルが貼ってあることが多い。そのレーベルに相当するものとして、音帯の裏にはシール【図9】が貼付されている。このシールに言及する文献がないため、正式名称は分からない。「タイトルシール」は仮称である。



【図7】音帯と箱（東京文化財研究所所蔵）



【図8】音帯と箱（リーフレット写真）



【図9】 フィルモン音帯（東京文化財研究所所蔵）部分

大きさは幅が約1センチ、長さは約10センチ、1本の音帯に貼られているタイトルシールは、確認した限りにおいて、9枚（約130センチ間隔）であった。素材については未調査である。

音帯を普通に（飛び出ている箇所を上にして）置くと、タイトルシールの天地は逆になる。外箱の紙ラベルと同様に、収録内容・演奏者・製品番号などが記されている。印字は黒いシールに金色なので、モノクロ写真にすると文字が判読しにくい。【図9】のタイトルシールに記されている曲目は「義太夫 艶容女舞衣（酒屋）」で、演奏者は豊竹駒太夫と鶴沢清二郎、製品番号は5006である。

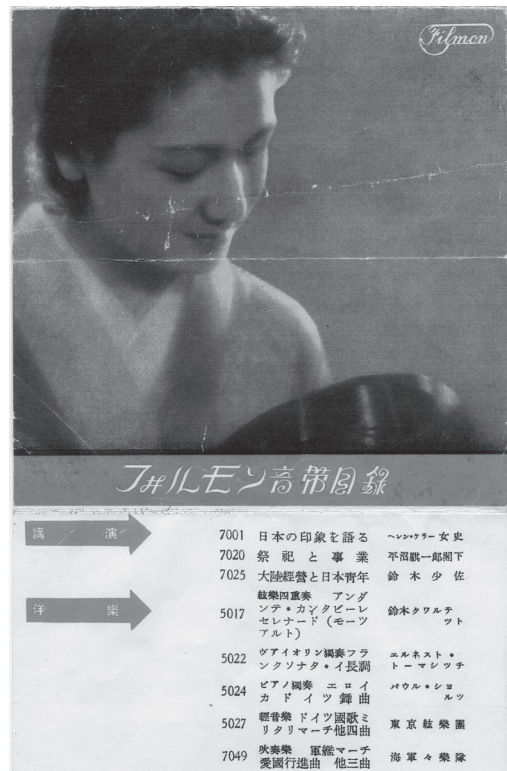
ところで、【図7】【図9】の音帯には、製品番号に加えて、丸括弧でくくられた別番号も記されている。図版では判別しにくいですが、【図7】では製品番号の右横に（118）、【図9】では製品番号の下に（75）とある。これは一部の音帯にしか付されていない。何を意味しているのかは不明である。製造番号だった可能性もある。

■目録■

フィルモン音帯の目録としては、『フィルモン音帯目録』¹¹⁾が知られている。2色刷りの1枚物で、8つ折にして配布していたと思われる。【図10】は、冊子であれば表紙に相当する部分と目録の冒頭である。ジャンルごとに分類した上で、製品番号、演目、主な出演者を記しただけの簡略な内容のカタログである。

『フィルモン音帯目録』（以下『音帯目録』）には、計107種の音帯が記載されている。今のところ、記載数でこれを超える目録は確認されていない。本報告の「フィルモン音帯一覧」（以下「音帯一覧」）は、『音帯目録』を基礎資料として作成している。

『音帯目録』の発行は昭和14年の4月か5月頃であろう。記載107種の内20種は「近日発売」として『音帯目録』の最後にまとめられている。その中で現存が確認されているひとつ、音帯7032『講演 時局ニ即シテ東郷元



【図10】 『音帯目録』（部分）

帥ヲ憶フ』¹²⁾は、付属の冊子（講演内容を文字起ししたもの）の末尾に「昭和14年3月23日講演吹込み」と記されており、収録日が特定できる珍しい事例である。『音帯目録』の作成は、この講演の収録から遠からぬ時期とみなしてよいであろう。短いフィルモンの歴史の中では、後半期に属する資料となる。

他方、『音帯目録』には記載されていないにもかかわらず、実在する音帯がある。それらの製品番号は、全て『音帯目録』記載の最新の製品番号より後のものとなっている（「音帯一覧」参照）。日本フィルモンの工場がどの時点まで稼働していたのかは確認できないのだが、少なくとも『音帯目録』発行後も新譜を出荷していたのは確実である。したがって、「近日発売」の20種についても、市販されていた可能性は高いと考えられる。

この他に目録に類するものとしては、音帯26種（「近日発売」6種を含む）を記載する1枚物の広告¹³⁾がある。「近日発売」の内3種が『音帯目録』で既発売となっている。発行年月未詳ながら、時期としては『音帯目録』よりも古いはずである。記載する音帯の数は『音帯目録』に遠く及ばないものの、今となっては珍しい資料¹⁴⁾といえるだろう。

発売されていた音帯に関する『音帯目録』以外の資料として、音帯付属の冊子（解説・文句集）も重要である。これらの冊子の末尾には、しばしば広告が掲載されており、そこに『音帯目録』未記載の音帯を見出せることがある。ただし、広告には発売中の音帯だけではなく、発売予定のものも掲載されていたらしい。次に掲げるのは、音帯7004『寄席風景』の冊子掲載広告の中で、目録の記載とは収録演目が異なっている音帯である。ほぼ同一の広告内容が、音帯7016『義臣伝二度目清書』の冊子にも見られる。

製品番号	目録	冊子掲載広告
7011	浪花節 当籤千両侍	浪花節 五郎正宗
7013	浪花節 明治一代女	浪花節 頭山翁と後藤新平
7020	講演 祭祀と事業	浪花節 恋の牛若丸
7026	初等英会話（第一輯）	浪花節 血煙高田馬場

広告で製品番号が明記された音帯で、なおかつ『音帯目録』と一致していないのは、明らかな誤植を除けば、現時点ではこの4本だけであった。上記の内、現存が確認されているのは、『音帯目録』記載の音帯7011『浪花節 当籤千両侍』と音帯7013『浪花節 明治一代女』である。より信頼度が高いのは『音帯目録』と判断し、本報告では製品番号7020と7026についても、『音帯目録』の記載を採用している。

『音帯目録』との齟齬は、冊子掲載の広告だけでは、現実に市販されたと認定するには不十分であることを示している。と同時に、冊子に広告掲載された音帯の大多数が、製品番号・収録内容ともに『音帯目録』と一致しているのも事実である。根拠となる資料が広告記事しか得られない音帯については、あくまでも当該製品番号の音帯が確認されるまでの暫定措置であることを前提に、「音帯一覧」に加えている。

贅言ながら、本報告では「音帯一覧」には採用しなかった上記の広告掲載の音帯4種は、全てが浪曲であった。その口演者は「浪花節 頭山翁と後藤新平」が木村重行、他の3本が春野百合子となっている。木村重行と春野百合子が録音した音帯は、現在のところ存在が確認されていない。これらの音帯が、製品番号違いで発見される可能性は皆無ではないように思われる。

3. フィルモン音帯の種類

フィルモン音帯は何種類が生産されたのか。[三浦1995]は、「約150種が録音され」としている。根拠は示されていない。そこで本報告では、今回の調査によって得られた結果から、改めてこの問題について考えることにしたい。

今回の調査で確認した限りにおいて、製品番号3000番台の最後が音帯3016『長唄 吉原雀』、5000番台が音帯5035『清元 其小唄夢廓』、7000番台が音帯7069『民謡レビュー 弥次喜多諸国唄栗毛』であった。残念ながら、音帯5019、5023、7067に関しては、タイトルが判明していない。仮に製品番号には欠番はなかった、つまり製品番号5019、5023、7067の音帯も実際に生産されていたのだとすれば、そして製品番号と収録内容が判明しながら現存が確認できない音帯（「音帯一覧」参照）の全てについても確実に生産されていたのだとすれば、市販されていた音帯の種類は少なくとも全120種（3000番台が16種・5000番台が35種・7000番台が69種）だったことになる。

音帯の生産総数については、[山中1974]に「フィルモンは1種類約5,000本でトータル50万本製造した」との記述がある。佐藤銀治郎からの情報なのであろう。単純に割り算をすると、制作した音帯は100種類となる。おそらく「1種類約5,000本」とは、平均で、ということなのだろうから、現時点での、少なくとも120種類という推定は、大きく外れてはいないのではないかと考えられる。問題は、120種以外に何種類が発売されていた可能性があるのか、であろう。

実際、録音された可能性が高いにもかかわらず、現存はおろか、製品番号や収録演目すら判明しない音帯がある。佐藤銀治郎が言及するパウル・ワインガルテン¹⁵⁾による、おそらくピアノ独奏の録音である。

これはワインガルテンですが（右の写真）、ピアノを録音しようと思って、ちょうどそのとき、ベヒシュタインがあったのかな、ベヒシュタインだとだめなんです、録音が。スタンウェイを借りて来ましてね、これはスタンウェイでしょう。[山中1974]

ベヒシュタイン（Bechstein）とスタンウェイ（Steinway）は、いうまでもなくピアノ製造会社の名称である。佐藤銀治郎の記憶が正しかったとすれば、パウル・ワインガルテンの音帯が実在したはずである。外国人の演奏する音帯は、製品番号5020番台の近辺に集中している（「音帯一覧」参照）。ことによると、タイトル不明の製品番号5019、5023だったのかもしれない。あるいは、未知の製品番号の音帯が存在するのかもしれない。

フィルモン音帯の種類の総数について、一つの仮説を提示したいと思う。

製品番号3000番台、5000番台、7000番台で、現存が確認されている中では最後の番号となる音帯は、全て演劇博物館の所蔵である（「音帯一覧」参照）。これらは演劇博物館に寄贈されたものであり、もともとは、佐賀県唐津在住の高取九郎（前出の高取盛とは義兄弟）が昭和15年5月に日本フィルモン社から入手した音帯¹⁶⁾であった。このとき高取九郎は50本の音帯を受け取っている。昭和15年5月に日本フィルモンが送った50本には、最新の音帯が含まれていたと仮定すると、昭和14年4月もしくは5月頃発行の『音帯目録』で「近日発売」となっている音帯20種、これに加えて「近日発売」以降の製品番号を持つ音帯が、『音帯目録』の発行以後、昭和15年5月までの間の約1年に新たに発売された音帯となる。そうした音帯は、製品番号3000番台で6種、5000番台で3種、7000番台で20種、合計すると29種（「音帯一覧」参照）、したがって『音帯目録』が発行された昭和14年4月もしくは5月以降の新譜の数は、半年平均で約15種だったことになる。

日本フィルモンが昭和15年の何月に解散したのかは、今のところ明らかではない。仮に解散は昭和15年の末であり、高取九郎に音帯を送った5月の時点から約半年の間も工場は操業を続け、なおかつ解散を間近に控えた時期でありながら、直前までの実績を維持していたとしたら、その間の新譜の発売は最大で15種類前後となるのではあるまいか。

現時点で、音帯の種類は最小でも120という数は、昭和15年5月の時点での延べ数とみなすことができる。昭和15年5月までの直前の実績である半年で新譜約15種が、解散まで最長で約半年という期間に発売できた上限と考える。生産されたフィルモン音帯の種類は120前後から、最大でも130前後であろう。仮定の上に仮定を重ねた上に、論の組み立てもいささか強引な、あくまでも一仮説である。

4. 「トーキングブック ヘレンケラー」

今回の調査では、通常であれば音帯の裏に9枚あるはずのタイトルシールが1枚もない、規格外の音帯の存在が確認された。大阪芸術大学博物館が所蔵するヘレン・ケラー（Helen Adams Keller 1880-1968）の音帯である。

外箱はない。音帯の裏面にはシールではなく、白墨液を使っているのであろうか、5か所に2行書きで「トーキングブック ヘレンケラー」と記されている。製品番号はない。

一方、『音帯目録』にはヘレン・ケラーが吹込んだ音帯7001『講演 日本の印象を語る』が記載されている【図10】。音帯7001の実物は確認していないのだが、音帯「トーキングブック ヘレンケラー」はそれと同じものではないかと思われる。

ヘレン・ケラーの初来日は昭和12年（1937）4月15日、米国から同行したのが秘書のポリリー・トンブソン（Polly Thompson 1885-1960）、離日が同年8月12日であった。

来日中のヘレン・ケラーが狛江の日本フィルモンを訪れ、録音を行ったことは、佐藤銀治郎の証言から確実である。

ヘレンケラーが録音に来たんですよ、戦前です。〈中略〉それから日本では岩崎という人だった

かな、そういう人たちがヘレンケラー関係の仕事をしていまして、向うから通訳も来まして、全然ぼくらには何いつているのかわからなかったが、録音したのがあります。[山中1974]

上記の発言中「岩崎という人だったかな」は、正しくは岩橋武夫（1889-1954）である。収録された音帯に通訳として参加している日本人男性が、おそらく岩橋武夫であろう。以下、岩橋武夫の事績については、主に参考文献 [ライトハウス1937] に拠っている。

岩橋武夫は、早稲田大学在学中の大正6年（1917）に網膜剥離で失明、早稲田大学を中退後、関西学院大学に入学、大正12年卒業、昭和2年（1927）に英国エジンバラ大学で学位を取得し、昭和10年には日本で最初の盲人福祉施設となる日本ライトハウスを大阪に設立した。昭和12年のヘレン・ケラー来日は、昭和9年12月に渡米中の岩橋武夫が招請し、実現したものであったという。来日が招請から数年後となったのは、岩橋武夫が面談した当時、アン・サリバン（Anne Sullivan 1866-1936）が病床に伏していたためであったとされる。

来日してからの約4か月の間、ヘレン・ケラーは、日本国内だけではなく、朝鮮・満州にまで足をのばし、精力的に講演活動を行った。全旅程で岩橋武夫は妻きをと共に同行し、日本語通訳を務めたという。音帯での通訳も岩橋武夫で間違いなかろう。

収録のために日本フィルモンを訪れたのは、ヘレン・ケラーとポリリー・トンプソンが離日する直前の某日であった。音帯冒頭の岩橋武夫による挨拶を次に引用する。音帯には冊子が付属していない。以下は、報告者による聞き取りである。

4月中旬、桜咲く日本に、ヘレン・ケラー女史が憧れの第1歩を踏みされてから約4月の間、西は長崎より北は札幌に至る、朝鮮満州を含むこの大旅行を通しまして、同女史が日本の朝野に与えた大きな興奮と感激とは、今なお我々の脳裏に深く植え付けられています。その感激、興奮の去りやらぬ今日、我々は同女史およびこれを日夜助けられたトンプソン女史をアメリカへお送りしなければならなくなりました。

この音帯の存在により、二人が横浜港から米国への帰途についた昭和12年8月12日以前に、日本フィルモン社の録音用施設が、他の工場施設に先立って完成していたことが分かる。フィルモン音帯の中でも、最初期に収録されたもののひとつなのであろう。

上記に続く挨拶で、この音帯の名称「トーキングブック ヘレンケラー」の所以が明らかとなる。

思えば日本の愛する盲聾啞者のために、ケラー女史がお尽くし下さった大きな事業、さては日米の国交親善のためお働き下さったその忘れがたい業績を思います時に、ご帰国に際して、その記念すべき御努力の跡を永く我々が覚えたいために、講演のひとつ節を我々の最初の試みであるライトハウスの事業としての物言う本、その第1巻にこれを収めたいと思うのであります。つきましては、ケラー女史にお話をいただく前、私とトンプソン女史との間にしばらく会話を続けてみた

いと存じます。

トーキングブックすなわち「物言う本」なのであった。「ライトハウスの事業としての物言う本」については、[ライトハウス1937] に言及されていないので、その詳細は不明である。

この音帯の収録時間は約30分、「私とトンプソン女史との間にしばらく会話を続けてみたいと存じます」と断っているように、収録内容の大半は、ポリー・トンプソンがヘレン・ケラーのこれまでの半生を語り、それを岩橋武夫が日本語に通訳するという形で進められている。

ヘレン・ケラーの肉声は、最後の残り7分程になってから、次に引用する挨拶の後に収録されていた。なお、下記の引用文中の「博士」とは、ヘレン・ケラーのことである。博士号は1932年にグラスゴー大学から授与されていた。この音帯の中で岩橋武夫は、時おりヘレン・ケラーを「博士」と呼んでいる。

これからトンプソン女史をわずらわせまして、手話を、指でお話を願いまして、博士自らのお声を、この上に記録したいと存じます。それを私が日本語に通訳してみることにいたします。

岩橋武夫からのヘレン・ケラーへの最初の質問は「Is there anything Miss Keller want to say for Japanese men ?」¹⁷⁾であった。それ以後の質問と返答も、音帯7001のタイトル「日本の印象を語る」であってもおかしくない内容となっている。

ただ、ヘレン・ケラー自身が話している時間は、それほど長くはない。岩橋武夫が英語で質問し、ヘレン・ケラーが答え、ポリー・トンプソンが同じ内容を（おそらく日本人にとっては聞き取りにくい発音だったために）繰り返し、それを岩橋武夫が通訳するという手順を踏んで録音されているからである。ヘレン・ケラーの最後の発話は、日本語での「サヨナラ、アリガトウ」であった。これも決して明晰な発音ではない。しかし「サヨナラ、アリガトウ」には聞こえる。生後19箇月で聴覚と視覚を失っていたことを思えば、やはり驚異的である。

収録内容そのものは、現在となっては耳新しい部分に乏しいとはいえ、ヘレン・ケラーの初来日の記録のひとつとして、さらには戦前の岩橋武夫、ポリー・トンプソンの肉声を留めている記録としても、貴重な資料といえるだろう。

音帯7001と音帯「トーキングブック ヘレンケラー」が同じものであるかは、音帯7001の実物が出現するまで、確定できない。とはいえ、内容には重複がある別録音が吹き込まれた可能性は低いのではないだろうか。

フィルモン音帯は、30分以上を収録することができた。ところが、収録後の編集はできなかった。戦後に実用化されたテープ録音との大きな違いである。長時間録音を完成させるには、ミスなしで長時間演奏をしなければならない。途中で失敗すれば、そこから別テイクで繋げることはできなかった。改めて最初から録り直しとなる。昭和12年8月、これまでに何度となく繰り返してきた講演内容ではあったとしても、「講演のひとつ」として30分内外に収めるため、リハーサルはこれまで以上に入念に行われていたに違いない。しかも、盲人であった岩橋武夫とヘレン・ケラーは、手元に読み

原稿を用意することができない。そうした骨の折れる吹込みを、離日直前の慌ただしさの中で、複数回こなしていたとは考えにくいように思われる。

根拠としては状況証拠のようなものしか提示できないのだが、本報告では、大阪芸術大学博物館所蔵「トーキングブック ヘレンケラー」を製品番号7001の音帯と同一内容と考え、「音帯一覧」に掲出することとした。

フィルモン音帯をプレスできる工場は、東京狛江にしかなかったはずである。何本の音帯が、タイトルシールを貼られることなく、つまり正規販売用の製品としてではなく出荷されたのか、それは全く不明である。大阪は岩橋武夫にとって所縁の地であった。音帯「トーキングブック ヘレンケラー」が大阪芸術大学博物館の所蔵となるに至った経緯が、将来、明らかになることになれば、あるいはその疑問の幾何かは解消されるのかもしれない。

5. おわりに

今回の報告は、現存する全てのフィルモン音帯に及んでいる訳ではない。とりわけ個人蔵の音帯について、およそ調査が行き届いていないであろうことは、十分に承知している。「音帯一覧」を含め、報告の内容は、ただ単に現時点で把握している音帯の総体というに過ぎない。今回の報告を機に、新たな情報もたらされることを期待している。

また、今回の報告では、各音帯の保存状態（コンディション）についても言及していない。とりあえず現存することは確認されたものの、実際には切れてしまっていたり、変形あるいは硬化といった素材の経年劣化によって、満足できる再生結果が、現時点では得られていない音帯も少なくないのである。こうした事柄については、音帯の録音内容とあわせ、改めて報告紹介することにしたい。

謝 辞

本報告をまとめるにあたっては、多くの方々より、ご助力や情報を賜りました（敬称略）。

磯貝健文、岩本元枝、大西秀紀、岡田則夫、加藤豊昌、久野太朗、久野雅晃、桜井弘、鈴木道夫、田里洋成、寺寄弘康、豊竹呂勢大夫、三浦敬吾、森脇秀樹、柳知明、八日市屋典之
また、フィルモン音帯を所蔵する次の機関からは、重要な情報を頂戴しました。

大阪芸術大学博物館、神奈川県立歴史博物館、金沢蓄音器館、国立国会図書館、テクニカ・ギャラリー、早稲田大学演劇博物館
記して、お礼を申し上げます。

《注》

- 1) 早稲田大学演劇博物館所蔵。
- 2) [山中1974] での表記「小西省三」は誤り。
- 3) 小西光沢堂は時計用ガラス製造会社。小西正三は小西光沢堂の重役であった。
- 4) 佐藤銀治郎「高取さんの東京の住宅が麹町2番丁あたりの大きな邸宅だったので、そこをしばらく建設事務所にしました」[山中1974]。引用に際しては、[山中1974] での誤記「鷹取」を「高取」に訂正。
- 5) 縦18センチ×横52センチ。両面刷り。個人蔵。
- 6) 早稲田大学演劇博物館所蔵。
- 7) [坪田1939] によれば、音帯の速度は毎秒610ミリ、音帯が1回転するのに要する時間は約21秒。
- 8) 早稲田大学演劇博物館所蔵。その素材については未調査である。
- 9) 「幅35mm、厚さ0.23mm、長さ13.111m」[坪田1939]。
- 10) 製品番号3001、3003、3005、3006。
- 11) 縦94センチ×横13センチ。片面刷り。個人蔵。ただし、現存が確認されているのは電子複写（カラー）で、原本の所在は不明。
- 12) 個人蔵。
- 13) 早稲田大学演劇博物館所蔵。ただし、電子複写（モノクロ）。原本の形状や出自等は不明。
- 14) 広告中の「レーベル種別」の欄では、製品番号5000番台を「赤」、7000番台を「緑」と、製品番号と紙ラベルの色との関連を明示している。3000番台の音帯は記載されていない。
- 15) Paul Weingarten (1886-1948)。オーストリア生まれのピアニスト。1921年からウィーン音楽大学教授。1936年4月3日に来日、1938年4月3日に帰国。その間、東京音楽大学（現在の東京芸術大学）で教鞭をとるかたわら、演奏活動も行う。滞在中、日本コロムビアにも録音をのこしている。
- 16) 日本フィルモン社の昭和15年5月15日付送品受取証が、音帯と併せ、早稲田大学演劇博物館に寄贈されている。
- 17) 「Japanese men」の「men」は「person」の意で用いられている。

《参考文献一覧》

- [大西2006] 大西秀紀「長時間レコードの復元再生について」
 CD『復元幻の「長時間レコード」山城少掾大正・昭和の文楽を聞く』解説
 紀伊國屋書店 2006-10
- [景山1970] 景山朋『蓄音機に憑かれて50年』 日本オーディオ協会 1970-01
- [谷1980] 谷勝馬「フィルモンの思い出」 『JAS Journal』 1980年7月号 1980-07
- [坪田1939] 坪田耕一「長時間演奏の出来るフィルモン式録音及び再生機構に就いて」
 『無線と実験』 190 1939-12
- [奈良1939] 「発明を中心として観たる細井勇氏及其諸関係」

奈良繁太郎編『東亜再建の使命を帯ぶ戦時日本発明界の人々 第三輯』所収

帝国発明家伝記刊行会 1939-07

[伴野1984] 伴野有市郎「フィルモン・レコードの再録音—SP時代の国産長時間レコード—」

『参考書誌研究』28 1984-10

[三浦1992] 三浦敬吾「SPレコードと録音」

『早稲田大学図書館紀要』36 1992-05

[三浦1995] 三浦敬吾「SPレコードと録音(2)」

『早稲田大学図書館紀要』42 1995-12

[山口1936] 山口亀之助『レコード文化発達史 第一巻』

録音文献協会 1936-04

[山中1974] 山中力「忘れられた国産長時間レコード「フィルモン」」

『SPレコード』8 1974-12

[ライトハウス1962] 日本ライトハウス40年史編集委員会『日本ライトハウス40年史』

社会福祉法人日本ライトハウス 1962-10

飯島 満 (東京文化財研究所無形文化遺産部)

永井美和子 (早稲田大学演劇博物館)

中山 俊介 (東京文化財研究所保存修復科学センター)

フィルム音帯一覧（2011年3月現在）

- 凡例
1. この一覧は『フィルム音帯目録』を基礎資料として作成している。
 2. 番号欄には、音帯の製品番号が記してある。
 3. 番号欄の「*」は、目録で「近日発売」となっていることを示す。
 4. 番号欄の「▲」は、目録に未記載であることを示す。
 5. 収録内容は、現物確認できた場合、原則として外箱ラベルの記載に従う。
 6. 所蔵欄の略号は以下の通り。
 - 演博：早稲田大学演劇博物館
 - 金沢：金沢蓄音器館
 - 個人：個人蔵
 - 国会：国立国会図書館
 - 大芸：大阪芸術大学音楽博物館
 - テク：テクニカ・ギャラリー
 - 東文：東京文化財研究所
 - 神奈歴博：神奈川県立歴史博物館
- 今回の調査では5人の個人所蔵者から情報の提供を受けている。
個人蔵については、アルファベットを付して所蔵者の違いを示してある。
7. 複数の同一音帯を所蔵する場合、その数を上付きの添字で示してある。
例えば「演博²」は演劇博物館が同一音帯を2本所蔵していることを示す。
 8. 一覧右端は、収録内容を示すことのできた音帯（推定を含む）の累計である。

番号	収録内容	主な出演者	所蔵	備考
3001	長唄 新曲浦島	松永和風、杵屋勝東治、他	演博 ² /国会/個人 <i>d</i>	[1]
3002	長唄 吾妻八景 松の緑	松永和風、杵屋五三郎、他	演博/大芸	[2]
3003	謡曲 小鍛冶	観世左近	演博/個人 <i>d</i>	[3]
3004	長唄 京鹿子娘道成寺	松永和風、杵屋五三郎、他	個人 <i>a</i> /個人 <i>e</i>	[4]
3005	長唄 小鍛冶 浦島	松永和風、杵屋五三郎、他	演博/個人 <i>a</i> ² /個人 <i>d</i>	[5]
3006	長唄 喜三の庭 もみぢ葉	松永和風、杵屋五三郎、他	個人 <i>d</i>	[6]
3007	長唄 石橋	松永和風、杵屋五三郎、他	演博	[7]
3008	長唄 竹生鳥	吉住小桃次、稀音家四郎助、他	演博	[8]
3009	長唄 四季の山姥	吉住小桃次、稀音家四郎助、他	演博 ²	[9]
3010	長唄 八重霞賤機帯(賤機帯)	吉住小桃次、稀音家四郎助、他	演博/個人 <i>e</i>	[10]
3011 [*]	長唄 雛鶴三番叟 都鳥	松永和風、杵屋五三郎、他	演博/国会	[11]
3012 [*]	長唄 鷺娘	吉住小桃次、稀音家四郎助、他	演博	[12]
3013 [*]	長唄 連獅子(勝三郎連獅子)	吉住小桃次、稀音家四郎助、他	演博	[13]
3014 [*]	長唄 五郎(時致) 菖蒲浴衣	松永和風、杵屋五三郎、他	演博	[14]
3015 [▲]	長唄 越後獅子	松永和風、杵屋五三郎、他	演博 ² /国会	[15]
3016 [▲]	長唄 吉原雀	松永和風、杵屋五三郎、他	演博	[16]
5001	舞踊地方用長唄 供奴 宝船	芳村金五郎、杵屋栄次郎、他	演博/国会/個人 <i>d</i>	[17]
5002	義太夫 本朝廿四孝(十種香)	竹本伊達太夫、鶴沢友次郎	個人 <i>b</i>	[18]
5003	義太夫 本朝廿四孝(狐火)	竹本伊達太夫、鶴沢友次郎	国会	[19]
5004	大薩摩 綱館	松島庄三郎、杵屋勝松、他	個人 <i>c</i> /個人 <i>d</i>	[20]
5005	長唄 外記猿	芳村金五郎、杵屋栄次郎、他	国会/個人 <i>d</i>	[21]
5006	義太夫 艶姿女舞衣(酒屋)	豊竹駒太夫、鶴沢清二郎	演博 ² /国会/東文	[22]
5007	常磐津 三つ面子守 夕月	常磐津一尾太夫、常磐津菊八、他		[23]
5008	舞踊地方用長唄 藤娘 蓬萊	芳村金五郎、杵屋栄次郎、他	演博/テク/個人 <i>d</i>	[24]
5009	清元 道行浮碇嶋	清元志寿太夫、清元菊輔、他	演博/国会	[25]
5010	義太夫 増補生写朝顔話	竹本伊達太夫、鶴沢友次郎、他	演博/東文/個人 <i>b</i>	[26]
5011	清元 おどけ俄煮珠取(玉屋)	清元志寿太夫、清元菊輔、他	金沢	[27]
5012	常磐津 乗合船恵方万歳 薪荷雪間の市川	常磐津一尾太夫、常磐津菊八、他	演/個人 <i>a</i> /個人 <i>e</i>	[28]

番号	収録内容	主な出演者	所蔵	備考
5013	常磐津 松廼羽衣	常磐津一尾太夫、常磐津菊八、他	東文	[29]
5014	舞踊地方用長唄 手習子 黒髪	芳村金五郎、杵屋栄次郎、他	演博 ² /国会/個人 <i>d</i>	[30]
5015	義太夫 恋女房染分手綱	竹本伊達太夫、鶴沢友次郎	大芸/東文/個人 <i>b</i> /個人 <i>e</i>	[31]
5016	舞踊音帯長唄 越後獅子 松の緑	芳村伊四郎、杵屋栄次郎、他	金沢/個人 <i>a</i>	[32]
5017	絃楽四重奏	鈴木クワルテット		
5017	アンダンテ・カンタービレ セレナード (モーツァルト)			[33]
5018 [▲]	長唄 羽根の禿 浦島	芳村伊四郎		*注記 1 [34]
5019 [▲]				未詳
5020	常磐津 三保松富士晨明	常磐津一尾太夫、常磐津菊八		[35]
5021	常磐津 花甌曆色所八景	常磐津一尾太夫、常磐津菊八、他	国会	[36]
5022	セザル・フランク ヴァイオリンソナタ (イ長調)	エルンスト・トーマシッチ、 パウル・シヨルツ	演博	[37]
5023 [▲]				未詳
5024	ピアノ独奏 エロイカ変奏曲 ドイツ舞曲	パウル・シヨルツ	国会/個人 <i>d</i>	[38]
5025	舞踊地方用長唄 大原女	芳村伊四郎、杵屋和八、他	演博/個人 <i>d</i>	[39]
5026	舞踊地方用長唄 汐汲	芳村伊四郎、杵屋栄次郎、他	演博/国会/大芸/個人 <i>d</i>	[40]
5027	軽音楽 ドイツ国歌 ミリタリマーチ 他四曲	東京絃楽団	国会	[41]
5028	清元 子守	清元志寿太夫、清元菊輔、他	国会/東文	[42]
5029	舞踊音帯清元 北州	清元志寿太夫、清元菊輔、他	演博	[43]
5030	常磐津 岸漣漪常磐松島	常磐津宮尾太夫、常磐津八百八、他		[44]
5031	常磐津 其儘廓八景 (廓八景) 花競俄曲搦 (粟餅)	常磐津宮尾太夫、常磐津八百八、他	国会	[45]
5032	常磐津 後の酒宴宴島台 (角兵衛)	常磐津宮尾太夫、常磐津八百八、他	演博/個人 <i>d</i>	[46]
5033 [*]	長唄 楠公	松島庄三郎		[47]
5034 [▲]	清元 深山桜及兼樹振 (保名)	清元志寿太夫、清元菊輔、他	演博 ²	[48]
5035 [▲]	清元 其小唄夢廊 (権上)	清元志寿太夫、清元菊輔、他	演博	[49]
7001	講演 日本の印象を語る	ヘレン・ケラー、ポリー・トムソン、 岩橋武夫	大芸	*注記 2 [50]
7002	筑前琵琶 湖水渡り	田中旭嶺	演博/国会/個人 <i>d</i>	[51]
7003	浪花節 森の石松 (三十石船)	広沢虎造	演博/国会	[52]

番号	収録内容	主な出演者	所蔵	備考
7004	寄席風景 電車 兒故の幸福 芋俵	春風亭柳好 千家松人形・千家松博次 柳家小さん	演博/大芸/個人a	[53]
7005	三曲 千鳥 乱段 六段	今井慶松、中能島敬子、 中能島欣一、納富寿童	演博/国会/個人a	[54]
7006	講談 寛永三馬術(度々平住込の巻)	大島伯鶴	金沢/国会	[55]
7007	義太夫 広助さわり集	豊沢広助	国会/東文/個人a	[56]
7008	義太夫 広助さわり集(二)	豊沢広助	東文/個人a	[57]
7009	童話劇 愛の学校 (孝行息子プレコシの巻)	生島潔子、東京コドモ会	演博	[58]
7010	漫談 浪曲学校	井口静波	個人a	[59]
7011	浪花節 当籤千両侍	林伯猿	個人d	[60]
7012	筑前琵琶 義士の本懐	田中旭嶺	国会/個人d	[61]
7013	浪花節 明治一代女	林伯猿	個人a	[62]
7014	薩摩琵琶 川中島	榎本芝水	演博/東文/個人a	[63]
7015	三曲 松竹梅	今井慶松、中能島敬子、 中能島欣一、納富寿童	東文	[64]
7016	講談 義士伝二度目清書	一龍斎貞山	演博/大芸/個人a/個人d	[65]
7017	講談 寛永三馬術(平九郎浪人の巻)	大島伯鶴	金沢/個人a	[66]
7018	浪花節 号外五円五拾銭	林伯猿	演博/個人a/個人d	[67]
7019	国史劇 信長と秀吉	東京コドモ会	個人d	[68]
7020	講演 祭祀と事業	平沼麒一郎		[69]
7021	義太夫 絵本太功記(尼ヶ崎)	竹本雛昇、豊沢小住	演博/個人d/個人e	[70]
7022	義太夫 伽羅先代萩(政岡忠義)	竹本雛昇、豊沢小住	個人d	[71]
7023	浪花節 新門と小金井	木村忠衛		[72]
7024	薩摩琵琶 石童丸	榎本芝水	個人a	[73]
7025	講演 大陸経営と日本青年	鈴木少佐		[74]
7026	初等英語会話(第一輯)	ジャック・プリンクリー、 I・E・フアミンジャー		[75]
7027	譚曲 紀の国屋文左衛門	栗島狭衣、名取巖、他	演博/東文	[76]
7028	譚曲 チョコレートと兵隊	栗島狭衣、名取巖、他	演博	[77]
7029	浪花節 誉れの槍術	東家楽遊		[78]
7030	中等英語会話	ジャック・プリンクリー、 I・E・フアミンジャー		[79]

番号	収録内容	主な出演者	所蔵	備考
7031	国民歌謡 第一輯 海ゆかば 夜明の歌 椰子の実 朝 白すみれ むかしの仲間 嫁ぐ日近く 日本よい国 ふるさとの 遂げよ聖戦	フキルモン混声合唱団 鳴海信輔、フキルモン男声合唱団 井上けい子、フキルモン混声合唱団 横田孝、フキルモン混声合唱団 竹本光江、フキルモン女声合唱団 鳴海信輔 竹本光江、フキルモン女声合唱団 井上けい子、鳴海信輔 井上けい子 横田孝、フキルモン混声合唱団	演博	*注記 3
7032*	講演 時局ニ即シテ東郷元帥ヲ憶フ	小笠原長生	個人 <i>d</i>	[80]
7033	国民歌謡 第二輯 大建設の歌 春の唄 山は呼ぶ、野は呼ぶ、海は呼ぶ Aの字の唄 日の出島 愛馬進軍歌 娘田草船 大日本の歌 利鎌の光 国に誓ふ	横田孝、フキルモン混声合唱団 井上けい子、フキルモン女声合唱団 横田孝、フキルモン混声合唱団 井上けい子 木川靖、フキルモン混声合唱団 宗ミチノ、横田孝、男声合唱団 佐藤春代、フキルモン女声合唱団 フキルモン混声合唱団 山野美和子、フキルモン女声合唱団 フキルモン混声合唱団	演博	*注記 4
7034	浪花節 塩原多助	東家楽遊		[81]
7035	浪花節 名士の面影	東家楽遊	国会/東文	[82]
7036	浪花節 次郎長外伝 富士川の血煙	広沢虎造	演博	[83]
7037	寄席風景 七段目 子ほめ 声色 舟徳	三遊亭円歌 柳亭芝楽 桜川春楽 桂文楽	演博/個人 <i>a</i>	[84]
7038	浪花節 慶安太平記 弥右衛門と正雪	木村忠衛	国会	[85]
7039	講談 越の海勇蔵	神田伯龍	東文	[86]
7040	講談 仇討神田祭(鳴物入り)	神田伯龍	演博/金沢/個人 <i>d</i>	[87]
7041	浪花節 義憤の太刀風	木村忠衛		[88]
7042	浪花節 塩釜大祭の血煙	木村友忠		[89]
7043	浪花節 三度笠股旅草鞋	木村友忠		[90]
7044	浪花節 出世太閤記	木村友忠	演博/神奈歴博	[91]
7045	初等英語会話(第二輯)	ジャック・プリンクリー、 I・E・フアミンジャー		[92]
7046	寄席風景 七福神 スフ時代 都々逸 支那そばや	文の家かしく 春風亭柳橋		*注記 5
7047*	浪花節 誉れの名馬	東家楽遊		[93]
				[94]
				[95]
				[96]

番号	収録内容	主な出演者	所蔵	備考
7048*	浪花節 二人部隊長	東家楽遊		[97]
7049	吹奏楽 軍艦マーチ パールシフアル 世紀の進軍 都の春 愛国行進曲	海軍軍楽隊、内藤清吾	演博	[98]
7050▲	浪花節 勤王美談小松嵐	東家楽遊		*注記 6 [99]
7051*	浪花節 統後の魂 (出征美談)	木村忠衛		[100]
7052*	浪花節 天野屋利兵衛	浪花亭綾太郎	国会	[101]
7053*	講演 渡洋爆撃	梅崎大佐		[102]
7054*	浪花節 曾我物語	浪花亭綾太郎		[103]
7055*	三方ヶ原合戦	神田伯龍		*注記 7 [104]
7056	軽音楽 サア、コレカラダヨ ラ、クンバルシータ シューベルトのセレナーデ ベニイ、ベニイ、 君よ花の如く清らかに サヨナラも云はずに 愛の花園 木曾節ルンパ ラ、メホラナ 春の歌	玉川みどり、田中福夫、 日本フキルモンジャズバンド 日本フキルモンタンゴバンド 久岡幸一郎	演博/国会/大芸/個人e	[105]
7057*	浪花節 正宗孝子伝	浪花亭綾太郎	個人e	[106]
7058	浪花節 身受山と石松	広沢虎造		[107]
7059*	浪花節 荻生徂徠	春日亭清鶴		[108]
7060*	浪花節 万両掣	春日亭清鶴		[109]
7061*	浪花節 鼠小僧次郎吉	春日亭清鶴		[110]
7062*	浪花節 子は鏡	木村松太郎		[111]
7063*	浪花節 慶安太平記 (快僧善達)	木村松太郎		[112]
7064*	浪花節 貞女美談 芝浜の革財布	木村松太郎	大芸	[113]
7065▲	箏曲 御代万歳 東獅子	今井慶松		*注記 8 [114]
7066▲	清元 色増枹夕映 (雁金) 貸浴衣汗雷 (夕立)	清元梅太夫、清元梅助、他	国会	[115]
7067▲				未詳
7068▲	ドラマ 土	丸山定夫、山本安英、本庄克二、 外新築地劇団	演博/国会	[116]
7069▲	民謡レビュー 弥次喜多諸国唄栗毛 (東日本の巻)	村田正雄、鈴木光子	演博	[117]

- *注記 1：音帯 5025、5026 の付属冊子に掲載された広告に拠る。
- *注記 2：本文 XXX 頁参照。
- *注記 3：曲の順番と演奏者の詳細は付属冊子に拠る。指揮は高階哲夫、伴奏は「フキルモン管絃楽団」。
- *注記 4：曲の順番と演奏者の詳細は付属冊子に拠る。指揮は高階哲夫、伴奏は「フキルモン管絃楽団」。
- *注記 5：目録に記載された出演者は菊蔵、由之助、小文字、かしく、柳橋。
- *注記 6：音帯 7003 の付属冊子に掲載された広告に拠る。演目の表記は、広告では「勤王美談小松風」。
- *注記 7：演目の表記は、目録では「味方ヶ原合戦」。
- *注記 8：音帯 7037、7039、7040 の付属冊子に掲載された広告に拠る。

[Summary]

Investigation of Filmon Endless Sound-Belt

IJIMA Mitsuru

Filmon endless sound-belt is a medium capable of recording for a long time. It was developed in Japan in the latter half of the 1930s. While the recording time of a 10-inch record, which was generally the most popular type of record at the time, is about 3 minutes, it was possible to record for over 30 minutes on a Filmon endless sound-belt.

Today, Filmon endless sound-belt is half forgotten for several reasons. First, it was manufactured only for a short period, from 1938 to 1940; second, a special player was necessary; and third, open-reel tapes and LP records appeared after World War II.

The National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo has been conducting joint-investigation of the Filmon endless sound-belt with The Tsubouchi Memorial Theatre Museum Waseda University since the fiscal year 2009. In this intermediate report, focus is placed on what types of contents were recorded on sound-belts and how many of each were manufactured as well as how many of them can be confirmed to exist today.

(see p. 59)



フィルモン音帯

撮影：コウ写真工房

Research and Reports on Intangible Cultural Heritage
Number 5
2011

Publisher:

National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo
13-43 Ueno Park, Taito-ku, Tokyo, 110-8713, Japan

無形文化遺産研究報告 第5号

平成23年3月26日印刷

平成23年3月31日発行

編 集	独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所 『無形文化遺産研究報告』編集委員会	
編集委員	無形文化遺産部長 無形文化財研究室長 音声・映像記録研究室長	宮田 繁 幸 高 桑 いづみ 飯 島 満
発 行	独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所 〒110-8713 東京都台東区上野公園 1343 電話 03 (3823) 2241	

© 独立行政法人国立文化財機構
東京文化財研究所 2011

National Research Institute for
Cultural Properties, Tokyo